



Hagi-Iwami Airport

IWJ

特集：萩・石見空港を支える人々



—「交流をつなぐ萩・石見空港」

島根県西部の活性化に向けて萩・石見空港の利用拡大事業に取り組んでいる島根県地域振興部次長の湊さん。企業誘致や地元の魅力発信、首都圏大学との連携による地域課題の解決につながるきっかけ作りなど、萩・石見空港を活用したまちづくりや交流人口の拡大に向けた政策立案の最前線で取り組んでおられます。



島根県地域振興部 次長
湊 直樹さん

萩・石見空港にかける想い

首都圏との交流人口を増やすことで石見地域の発展に。空港はその交流をつなぐ大事な存在です。



湊さんとの対談風景。県の取り組みについて熱心に説明してくださった。

堀本さんとの対談

—どのような想いで利用促進事業に取り組まれていますか？

堀本さん「現在、石見と羽田間で、一日二往復復航していますが、利用者が減少すれば減便されてしまいかねません。一日往復に戻ってしまうと、もう一度一日二往復に戻すことは困難です。空港そのものの存在も危機的になります。地域経済にとっても空港の維持・発展は不可欠で、何としても二往復復航を継続していく必要があります。そのために、少しでも多くの人に空港の便利さ

湊さんとの対談

—空港利用者の拡大に向けてユニークな取り組みをしているそうですね

湊さん「島根県では『教育の魅力化』として、首都圏中学校を対象とした県内高校見学ツアーを実施しており、高津川流域市町では『都市間交流』として、首都圏大学生による地域課題解決のきっかけ作りなどにも力を入れています。他にも、有名なシェフに地元の食材を使って料理をしても良かったり、人気ブログに島根県を紹介しても良かったりと、『地元の魅力発信』にも取り組んでいます。」

や空港の存在意義を知ってもらいたいと考えています。そうしたきっかけづくりに、これまでも取り組んできましたが、今後、さらに加速させていただきます。

—助成金事業は大きな役割を果たしていますね

堀本さん飛行機は高いというイメージもありますが、新幹線は高速交通機関ですが、それをベンチマークに、ほぼ同額になるように支援しています。こうした支援を通じて、飛行機を利用してもらう動機付けになればと思います。

—一日二往復復航になったことにより、どんな効果がありましたか？

湊さん「何より利用者のスケジュール設定が柔軟になりました。観光のみならず、業務出張もやすくなりました。旅客数が増えたこともあり、経済波及効果も倍増したという試算もあります。」

—これから取り組んでいきたいことは何ですか？

湊さん「信号が少なく適度な起伏のある石見地域はサイクリングにもってこい。空港にもサイクリング専用道の更衣室などを設けました。今後は山口県とも連携して誘致に取り組みたいです。」



堀本さんとの対談風景。利用促進事業にかける想いについてお話しいただいた。

益田市に欠かせない存在の萩・石見空港。益田市空港対策室の堀本さんは、2便運航を継続させるために、市民に空港の大切さを訴えてきました。その成果により、平成30年3月までだった1日2往復復航が平成32年3月までの延期が決定しました。「益田市から島根県を元気に」をモットーに萩・石見空港のさらなる発展に尽力されています。

(聞き手：時乗真樹 (3年生))

萩・石見空港にかける想い

萩・石見空港の存在を活かして、益田市から島根県全体を元気にしていきたい。



益田市空港対策室 室長
堀本 剛さん

—「益田市から島根県を元気に」



◀ 石見空港ターミナルビル株式会社 前・代表取締役社長 本橋 春彦さん

「ミツバチはきれいな環境でしか生きられない生き物で、『環境指標生物』とも言われます。」花が汚染されていれればミツバチは生きられない。つまり、ミツバチが飛んでいる場所は、人間にとっても安心できる綺麗な場所というわけだ。

「常にお客様のため、空港ビルのため、地域のために自分自身が何が出来るかを考える。」在職中に商品として世に送り出した「空港はちみつ」は空港の敷地内に設置された養蜂場で採取されたハチミツ。空港での養蜂は世界的にも珍しく、アジアでは唯一なのだから。華やかな香りもする爽やかな甘み。いまや発売とともに売り切れるヒット商品となった。

今回、インタビューを引き受けてくださったのは、本橋春彦さん。平成二十七年6月から平成三〇年6月までの3年間、石見空港ターミナルビル株式会社の代表取締役社長として活躍された。



「空港は地域の玄関口であるからこその他とは違うことをする。」よそから来られたお客様にも、石見地域の良さを知ってもらい、好きになってもらう。「足を運んだ甲斐があった」というお客様の満足の積み重ねが、地域や空港の発展につながる。

本橋さんいわく「空港は飛行機を飛ばすためだけの場所ではない」という。確かに、飛行機に乗る機会があまりないという人も多い。しかし、空港に親しみを持ってくれば、空港を維持することも難しくなる。

「たくさんのお客様に楽しんでもらうために様々なサービスをお届けしたい。」空港ハチミツの商品化は、この思いを形にした結晶そのものだ。「本当はまだまだ新しいことにチャレンジしてみたい」本橋さんの熱意は、萩・石見空港を支えるすべての人々の思いと重なって見えた。

〈聞き手：石本千晶〉



▲株式会社石見エアサービス 空港営業所の方々 (右から斎藤さん、澄川さん、伊藤さん)

「空港は旅の始まりと終わりの特別な場所」そう語ってくださったのは、部長の斎藤さん。多くの旅行者にとって飛行機に乗る日は、いわばハレの日。大きな荷物を抱えて旅行に出かける人、故郷に戻り久々の再会を喜ぶ人、まさに様々な人生模様が空港で交錯する。

「空港は旅の始まりと終わりの特別な場所」そう語ってくださったのは、部長の斎藤さん。多くの旅行者にとって飛行機に乗る日は、いわばハレの日。大きな荷物を抱えて旅行に出かける人、故郷に戻り久々の再会を喜ぶ人、まさに様々な人生模様が空港で交錯する。

萩・石見空港では、お年寄りや子どもたちが多く利用する。実際にサービスを担当する澄川

さんいわく、「お客様の中には、飛行機に乗りなれていない方もいらっしゃる。『いま、ここで、どういうサポートが必要か』、お客様のご様子や、やりとりの中から判断します」。

伊藤さんも「お客様の対応には正解がありません。それがかえって、自分たちのやる気や成長につながっています」とのこと。

毎日、ミーティングして、その日の業務を振り返り、情報を共有する。受け手が嬉しく思う「おもてなし」は、こうしたスタッフそれぞれの試行錯誤と、高いコミュニケーション力があってのことなのかもしれない。

「どうしたら、お客様にワクワクしてもらえるか、常に考えますし、そもそも我々がワクワクしないといけませんね。」

「小さな地方の空港だからこそ、ひとりひとりに寄り添い、きめ細やかにサポートし、お客様の旅の一幕を演出したい。」

インタビューに応じてくださったスタッフの皆さん言葉の端々に、安心感と温かみを感じた。余談ながら、学生の筆者は、来年度、就職活動だ。仕事への興味はもちろんだが、気配り上手で明るいスタッフは、きつとチームとしても助け合い、職場としても働きやすいはず。こんな方々と一緒に働いてみたいと夢はますます大きくなった。

〈聞き手：石本千晶〉

地域の宝である萩・石見空港を守りたい！

若者に地域の将来を委ねるために

「地元空港があることによる企業への恩恵は？」

大畑さん「企業経営はスピードが命。出張・移動しやすいい環境は何より大切です。また、従業員の研修・セミナーも東京は充実しています。研修への参加は、地域の企業の競争力を高めるうえで、とても重要なことなのです。」

「企業に空港利用を促すうえで工夫していることは？」

大畑さん「企業に『利用してください』と言うのは簡単。しかし、それでは人は動いてくれません。そこで、我々は実際に会社を何度も訪問し、コミュニケーションを通して信頼関係を構築することを心がけています。」

三浦さん「チラシなども作成していますが、そこでは見ていただく人たちの目を引く、インパクトも大事。昨年度作成したチラシでは、『地域のピンチ』というインパクトのあるフレーズを用いました。なかなか勇気のいる表現でしたが、『空港が大変だ』と言つてもなかなか伝わりません。ある意味、我々の危機感の裏返しでもあります。このチラシは多くの方から反響をいただきました。」

「萩・石見空港の将来に向けてメッセージを。」

大畑さん「再び」往復運航に戻してはいけない。そういう相当な危機感を持っています。もちろん、夢やビジョンがないと大きなムーブメントは生まれません。どんな街を次世代に残すか。地方でも、便利に住みやすい街でない。次の世代のことも見据えて、今後も空港活性化に取り組み決意です。」



大畑正一さん
益田商工会議所
地域開発委員会委員長



三浦康広さん
益田商工会議所総務課長

航空路線は忙しく飛び回るビジネスパーソンにとって不可欠です。益田商工会議所は、従来から空港の利用促進に向けて取り組んできました。また、萩・石見空港。利用拡大促進協議会は、平成22年より、萩・石見空港の航空路線を積極的に

利用する企業・団体を「萩・石見空港サポーター企業・団体」として登録認定しています。今回は、企業・団体として空港にかかわる方々にお話を伺いました。

(聞き手：山田基貴)

空港は地域の医療も守る



松ヶ丘病院理事・事務部長
豊田政幸さん

「病院にとっての空港のメリットは？」

「2つあります。まず、患者さんのご家族が、いつでもすぐに見舞いに来ることができる点です。何時間もかかると見舞いも億劫になりかねません。やはり家族の絆を保つうえで、利便性が高ければ安心です。また、各種研修の実施や、福利厚生の実施等を通じ、高度な人材の確保につなげられるメリットもあります。」

「商工会議所のチラシでは「地域医療の確保」にも空港が役立っている」とありました

「当院では、平成23年度から、月1回、眼科の先生に東京から非常勤で診察に来ていただいています。現在、医師の確保は相当難しく、空港がなければ忙しい先生に来ていただくのは難しいでしょう。」

さらに、当院に来ていただいている先生はたいへん熱心で、精神科特有の疾患についても勉強しておられます。我々としても助かっており、こうした環境は今後もぜひとも確保してほしいと思います。」

「空港の利活用に向けた今後の取り組みは？」

「人々の就労支援として、ホースセラピーに取り組むみたいですね。益田市と交流協定を結んでいる川崎市とも協力して取り組み、患者さんのみならず、都会でストレスを抱えている人たちへの癒しを提供する。我々の強みを活かしつつ、空港利用に結びつけたいですね。」

自分たちの地域は楽しい！

伊藤さんは東京の大手ゲームメーカーで長年マネジメント業務に携わっていました。東北の震災をきっかけに、「地域のつながり」の大切さに気付かされたといいます。

地元の江津市にUターンした後は、それまでのキャリアを生かし、観光で地域を盛り上げる様々な「仕掛け」に取り組んでいます。「オンパク」はそのひとつ。これは、地域の人々と町の魅力を体験してもらうイベント企画で、大分県別府市の温泉をテーマとして当初企画されたことから名づけられたものです。

その手法を石見地域に持ち込み、「石見版オンパク」として、様々な着地型観光プランや地域体験プログラムをまとめた冊子「いわみん」を創刊しました。2013年5月の創刊以来、「いわみん」には毎回、石見地方の魅力的な歴史や文化、食などを体験する様々なプログラムがずらりと並んでいます。決して、大人数を募集するわけではありませんが、地域の人々や地域でのふれあいを体験できる魅力的なプログラムです。

一年前から萩、石見空港の「萩・石見空港利用拡大促進協議会観光コーディネーター」としても活躍し、こうした手法の活用を模索しておられます。聞き手:木山侑映(2年生)

イワミノチカラ代表
伊藤康之さん

1971年 島根県江津市出身
2012年 江津市にUターン

一人ひとりがPRの 広報マンになってほしい

萩・石見空港利用拡大促進協議会観光コーディネーターに就任して、真っ先に取り組んだのが空港を舞台にした体験型ツアーでした。「萩・石見空港は1日2便ですが、これを逆手にとってみよう」という逆転の発想から生まれた企画でした。

親子を対象としたこのイベントは、普段、空港に来ないような人たちにも好評を博し、参加者にも大いに楽しんでもらえました。

伊藤さんいわく、「地域の人に、空港は単なる通過点ではなく、わくわくする楽しい場所だと感じてほしい」とのこと。「田舎は何もないと思われがちだけれども、都会では絶対に体験できないことがある」という強い思いが、インタビューからもあふれてきます。

「石見地域の良さを体験を通して肌で感じてもらい、それをいろんな人に伝えてほしい」。まさに、「いわみん」に参加してくれる一人一人が広報マンとなって地域を盛り上げてくれたら、これほどうれしいことはない」といいます。

最近では、インスタグラムやフェイスブックなど、SNSの持つ力は侮れません。「田舎だからこそできる何かがあるー」アイデアとバイタリティ溢れる伊藤さんは、次を見据えています。聞き手:木山侑映(2年生)



▲体験型旅行の冊子「いわみん」。年数回発行される。地元の人々が企画者となる。アイデアを凝らした企画があちこちで開催される。



▲「いわみん」企画のひとつ「親子で体験する空港見学ツアー」での一コマ。飛行機を間近で見ることができた。

石本 千晶

(島根県立大学 3 回生)

今回は、リーフレットのコンテンツ企画から取材、原稿執筆、そしてデザインの検討など、様々な仕事を経験しました。自分が読者だったら何を知りたいのか、また、取り上げられる側だったら何をどう伝えてほしいのか、両者の立場を考えることを心がけたつもりです。

「伝えられる」、「伝わる」、そんなリーフレットを作りたく、メンバーで試行錯誤しながら作成しました。ぜひ手に取って、最後まで読んでいただくと嬉しいです。

時乗 真樹

(島根県立大学 3 回生)

今回のインタビューを通じて、萩・石見空港を維持するために、実はたくさんの方が活動されていることがよく分かりました。「萩・石見空港はそこにあって当たり前」かもしれませんが、普段、我々の目にはつかない活動を、多くの人に知ってもらいたいとの思いで今回リーフレット作成に取り組みました。空港があることのありがたさ、また、萩・石見空港に携わる方々の、空港への想い・期待を一人でも多くの方々に伝えていきたいです。

今回の インタビュー を終えて



山田 基貴

(島根県立大学 2 回生)

萩・石見空港には熱い思いをもって努力しておられる方が多くいます。例えば、商工会議所ではチラシを作成して、空港の現状認識を市民と共有したり、企業に戸別訪問して利用を呼びかける等の活動をしておられました。病院でも首都圏から医師の応援があることで、地域の医療にも空港が一翼を担っていると分かりました。空港の活性化に向けて真剣に取り組んでおられる方々に、ぜひ注目していただきたいです！

木山 侑映

(島根県立大学 2 回生)

私は萩・石見空港を今まで利用したことがありませんでした。しかし、実際にヒアリングさせていただくと、どの方にも共通して萩・石見空港に対する熱い思いを持ち、空港を盛り上げようという意識が高いという印象を受けました。利用促進のためにここまで趣向を凝らしている空港はなかなかないと思います。萩・石見空港だからこそできる、あたたかいお客様サービスを是非もっと多くの人に知っていただくとともに、実際に利用して体感してほしいです。

次回予告～次回は私たちが担当します！～



次回は空港の役割について紹介します。空港を生かした地域づくりの最前線を、私たちがリポートいたします！

発行：島根県立大学西藤ゼミ

〒697-0016

島根県浜田市野原町2433-2

島根県立大学研究棟313号室

TEL：0855-24-2264

次回、
十二月、
発行予定
お楽しみに！